

さいかち淵

宮沢賢治

青空文庫

八月十三日

さいかち淵ぶちなら、ほんとうにおもしろい。

しゅつこだつて毎日行く。しゅつこは、舜しゆんいち——なんだけれども、みんなはいつでもし

ゅつこという。そういわれても、しゅつこは少しも怒おこらない。だからみんなは、いつでもしゅつこしゅつこという。ぼくは、しゅつこは、いちばん仲なかがいい。きょうもいつしよに、出かけて行つた。

ぼくらが、さいかち淵およで泳いでいると、発破はつぱをかけに、大人おとなも来るからおもしろい。今日のひるまもやつて来た。

石神いしがみの庄しょうすけ助すけがさきに立つて、そのあとから、練瓦場れんがばの人たちが三人ばかり、肌ぬぎになつたり、網あみを持ちたりして、河原かわらのねむの木のところを、こつちへ来るから、ぼくはきつと発破はつぱだとおもつた。しゅつこも、大きな白い石をもって、淵ぶちの上のさいかちの木にのぼっていたが、それを見ると、すぐに、石を淵おとに落して叫さけんだ。

「おお、発破だぞ。知らないふりしてる。石とりやめて、早くみんな、下流しもへさがれ。」

そこでみんなは、なるべくそつちを見ないようにしながら、いつしよに下流の方へ泳いだ。しゅつこは、木の上で手を額にあてて、もう一度よく見きわめてから、どぶんと逆まに淵へ飛びこんだ。それから水を潜つて、一ぺんにみんなへ追いついた。

ぼくらは、淵の下流の、瀬になつたところに立つた。

「知らないふりして遊んでろ。みんな。」しゅつこが云つた。ぼくらは、砥石をひろつたり、せきれいを追つたりして、発破のことなぞ、すこしも気がつかないふりをしていた。

向うの淵の岸では、庄助が、しばらくあちこち見まわしてから、いきなりあぐらをかいて、砂利の上へ座つてしまった。それからゆっくり、腰からたばこ入れをとつて、きせるをくわいて、ぱくぱく煙をふきだした。奇体だと思つていたら、また腹かけから、何か出した。「発破だぞ、発破だぞ。」とペ吉やみんな叫んだ。しゅつこは、手をふつてそれをとめた。庄助は、きせるの火を、しずかにそれへうつした。うしろに居た一人は、すぐ水に入つて、網をかまえた。庄助は、まるで電車を運転するときのように落ちついて、立つて一あし水にはいると、すぐその持ったものを、さいかちの木の下のところへ投げこんだ。するとまもなく、ぼおというようなひどい音がして、水はむくつと盛りあがり、それからしばらく、そこらあたりがきいんと鳴った。練瓦場の人たちは、みんな水へ入った。

「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ。」としゅつこが云った。まもなく、小指ぐらの茶
 いろなかじかが、横よこむ向きになつて流れて来たので、取とろうとしたら、うしろのほうで三
 郎うが、まるで瓜うりをすするときのような声を出した。六寸すんぐらいある鮎ふなをとつて、顔をま
 つ赤かにしてよろこんでいたのだった。「だまつてろ、だまつてろ。」しゅつこが云った。

そのとき、向うの白い河原かわらを、肌はだぬぎになつたり、シャツだけ着きたりした大人おとなや子ども
 らが、たくさんかけて来た。そのうしろからは、ちようど活かつどう動写しやしん真まのように、一人の
 網あみシャツを着た人が、はだか馬うまに乗のつて、まっしぐらに走はつて来た。みんな発破はつぱの音を聞
 いて、見みに来たのだ。

庄しょうすけ助すけは、しばらく腕うでを組くんで、みんなのとるのを見ていたが、「さつぱり居いないな
 。」と云いつた。けれども、あんなにとれたらたくさんだ。練瓦場れんがばの人たちなんか、三十疋びき
 ぐらいもとつたんだから。ぼくらも、一疋か二疋なら誰だれだひろつて拾ひろつた。庄助は、だまつて、
 また上流かみへ歩あきだした。練瓦場れんがばの人たちもついていった。網あみシャツの人は、馬うまに乗のつて、
 またかけて行いつたし、子どもらは、ぼくらの仲間なかまにはいろうと、岸きしに座すわつて待まつていた。
 「発破はつぱかけたら、雑魚ざこま撒まかせ。」三郎さぶろうが、河原かわらの砂すなつぱの上うで、ぴよんぴよんはねなが
 ら、高たかく叫さけんだ。

ぼくらは、とつた魚を、石で囲んで、小さな生洲をこしらえて、生き返つても、もう遁げて行かないようにして、また石取りをはじめた。ほんとうに暑くなつて、ねむの木もぐつたり見えたし、空もまるで、底なしの淵のようになった。

そのころ誰かが、

「あ、生洲、打壊すところぞ。」と叫んだ。見ると、一人の変に鼻の尖つた、洋服を着てわらしをはいた人が、鉄砲でもない槍でもない、おかしな光る長いものを、せなかにしよつて、手にはステッキみたいな鉄槌をもつて、ぼくらの魚を、ぐちやぐちや掻きまわしているのだ。みんな怒つて、何か云おうとしているうちに、その人は、びちやびちや岸をあるいて行つて、それから淵のすぐ上流の浅瀬をこつちへわたろうとした。ぼくらはみんな、さいかちの樹にのぼつて見ていた。ところがその人は、すぐに河をわたるでもなく、いかにもわらしや脚絆の汚くなったのを、そのまま洗うというふうに、もう何べんも行つたり来たりするもんだから、ぼくらはいいよ、気持ちが悪くなつてきた。そこで、とうとう、しゅつこが云つた。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶこだ。いいか。

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生せんせい云うでないか。一、二い、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生云うでないか。」その人は、びっくりしてこつちを見たけれども、何を云ったのか、よくわからないというようすだった。そこでぼくらはまた云った。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、云うでないか。」鼻はなの尖とがった人は、すばすばと、煙草たばこを吸うときのような口つきで云った。

「この水呑のみむのか、こちらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」鼻の尖った人は、少し困こまったようにして、また云った。

「川をあるいてわるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」その人は、あわてたのをごまかすように、わざとゆつくり、川をわたって、それから、アルプスの探険たんけんみたいな姿勢しせいをとりながら、青い粘土ねんどと赤砂利あかじりの崖がけをななめにのぼって、せなかにしよつた長いものをぴかぴかさせながら、上

の豆 畠へはいってしまった。ぼくらも何だか気の毒なような、おかしながらんとした
気持ちになった。そこで、一人ずつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭に
つつんだり、手にもったりして、家に帰った。

八月十四日

しゅっこは、今日は、毒もみの丹礬をもつて来た。あのトラホームの眼のふちを擦る
青い石だ。あれを五かけ、紙に包んで持つて来て、ぼくをさそつた。巡查に押えられる
よと云つたら、田から流れて来たと言えばいいと云つた。けれども毒もみは卑怯だから、
ぼくは厭だと答えたら、しゅっこは少し顔いろを変えて、卑怯でないよ、みみずなんかで、
だまして取るよりいいと云つて、あとはあんまり、ぼくとは口を利かなかつた。その代り
しゅっこは、そこら中を、一軒ごとにさそつて歩いて、いいことをして見せるからあつま
れと云つて、まるで小さなこどもらまで、たくさん集めた。

ぼくらは、蟬が雨のように鳴いているいつもの松林を通つて、それから、祭のとき
の瓦斯のような匂のむつとする、ねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵に行つ

た。今日なら、もうほんとうに立派な雲の峰が、東でむくむく盛りあがり、みみずくの頭の形をした鳥ヶ森も、ぎらぎら青く光って見えた。しゅつこが、あんまり急いで行くもんだから、小さな子どもらは、追いつくために、まるで半分馳けた。みんな急いで着物をぬいで、淵の岸に立つと、しゅつこが云った。

「ちゃんと一列にならべ。いいか。魚浮いてきたら、泳いで行つてとれ。とつたくらい与るぞ。いいか。」小さな子どもらは、よろこんで顔を赤くして、押しあつたりしながら、ぞろつと淵を囲んだ。ペ吉だの三、四人は、もう泳いで、さいかちの木の下まで行つて待つていた。

しゅつこが、大威張りで、あの青いたんぼんを、淵の中に投げ込んだ。それから、みんなしいんとして、水を見つめて立つていた。ぼくは、からだが上流の方へ動いているような気持ちになるのがいやなので、水を見ないで、向うの雲の峰の上を通る黒い鳥を見ていた。ところがそれからよほどたつても、魚は浮いて来なかった。しゅつこは大へんまじめな顔で、きちんと立つて水を見ていた。昨日発破をかけたときなら、もう十疋もとつていたんだと、ぼくは思った。またずいぶんしばらくみんないんとして待った。けれどもやっぱり、魚は一ぴきも浮いて来なかった。

「さつぱり魚、浮ばないよ。」三郎が叫んだ。しゅつこはびくつとしたけれども、まだ一しんに水を見ていた。

「魚さつぱり浮ばないよ。」ペ吉が、また向うの木の所で云った。するともう子どもらは、がやがや云い出して、みんな水に飛び込んでしまった。

しゅつこは、しばらくきまり悪そうに、しやがんで水を見ていたけれど、とうとう立つて、

「鬼つこしないか。」と云った。「する、する。」みんなは叫んで、じゃんけんをするために、水の中から手を出した。泳いでいたものは、急いでせいり立つところまで行って手を出した。しゅつこが、ぼくにもはいらないかと云ったから、もちろんぼくは、はじめから怒っていたのでもないし、すぐ手を出した。しゅつこは、はじめに、昨日あの変な鼻の尖った人の上って行った崖の下、青いぬるぬるした粘土のところを根っこにきめた。そこに取りついていれば、鬼は押えることができない。それから、はさみ無しの一人まけかちで、じゃんけんをした。ところが、悦治はひとりはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になった。悦治は、唇を紫いろにして、河原を走って、喜作を押えたもんだから、鬼は二人になった。それからぼくらは、砂つばの上や淵を、あっちへ行つた

り、こつちへ来たり、押えたり押えられたり、何べんも鬼つこをした。

しまいにとうとう、しゅつこ一人が鬼になった。しゅつこはまもなく吉郎をつかまえた。ぼくらはみんな、さいかちの木の下に居てそれを見ていた。するとしゅつこが、吉郎、

汝^{おまい}、上流^{かみ}から追つて来い、追え、追え、と云いながら、じぶんはだまって立って見ていた。

吉郎は、口をあいて手をひろげて、上流から粘土^{ねんど}の上を追つて来た。みんなは淵^とへ飛び込む仕度^{したく}をした。ぼくは楊^{やなぎ}の木にのぼつた。そのとき吉郎が、たぶんあの上流の粘土^{ねんど}が、足

についたためだつたらう、みんなの前ですべてころんでしまった。みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水に入ったりして、上流の青い粘土の根に上つてしまった。

「しゅつこ、来^こ。」三郎は立って、口を大きくあいて、手をひろげて、しゅつこをばかにした。するとしゅつこは、さつきからよつほど怒^{おこ}っていたとみえて、「ようし、見てろ」

と云いながら、本気になつて、ぎぶんと水に飛び込んで、一^{いっしょう}生^{せい}けん命^{めい}、そつちの方^{かた}へ泳いでいった。子どもらは、すっかり恐^{こわ}がってしまった。第一^{だいいち}、その粘土のところはせ

まくて、みんながはいれなかつたし、それに大へんつるつるすべる傾斜^{けいしゃ}になつていたものだから、下の方の四、五人などは上の人につかまるようにして、やっと川へすべり落ち^おるのをふせいでいた。三郎だけが、いちばん上で落ち着^ついて、さあ、みんな、とか何とか

相談らしいことをはじめた。みんなもそこで、頭をあつめて聞いている。しゅつこは、ぼちやぼちや、もう近くまで行つていた。みんなは、ひそひそはなしている。するとしゅつこは、いきなり両手で、みんなへ水をかけ出した。みんながばたばた防いでいたら、だんだん粘土がすべつて来て、なんだかすこうし下へずれたようになった。しゅつこはよろこんで、いよいよ水をはねとばした。するとみんなは、ぼちゃんぼちゃんと一度に水にすべつて落ちた。しゅつこは、それを片つぱしからつかまえた。三郎ひとり、上をまわつて泳いで逃げたら、しゅつこはすぐに追い付いて、押えたほかに、腕をつかんで、四、五へんぐるぐる引っぱりまわした。三郎は、水を呑んだとみえて、霧をふいて、ごほごほむせて、泣くようにしながら、

「おいらもうやめた。こんな鬼つこもうしない。」と云つた。子どもらはみんな砂利に上つてしまった。三郎もあがつた。しゅつこは、そつと、あの青い石を投げたところをのぞきながら、さいかちの樹の下に立つていた。

ところが、そのときはもう、そらがいつぱいの黒い雲で、楊も変に白つぽくなり、蟬があがあ鳴いていて、そこらは何とも云われない、恐ろしい景色にかわつていた。

そのうちに、いきなり林の上のあたりで、雷が鳴り出した。と思うと、まるで山つなみ

のような音がして、一ぺんに夕立がやってきた。風までひゅうひゅう吹きだした。淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなってしまった。河原にあがった子どもらは、着物をかかえて、みんなねむの木の下へ逃げこんだ。ぼくも木からおりて、しゅつこといっしよに、向うの河原へ泳ぎだした。そのとき、あのねむの木の方かどこか、烈しい雨のなかから、

「雨はざあざあ、ざつこざつこ、

風はしゅうしゅう、しゅつこしゅつこ。」

というように叫んだものがあつた。しゅつこは、泳ぎながら、まるであわてて、何かに足をひっぱられるようにして逃げた。ぼくもじつさいこわかった。ようやく、みんなのいるねむのはやしについたとき、しゅつこはがたがたふるえながら、

「いま叫んだのはおまえらだか。」ときいた。

「そでない、そでない。」みんなは一しよに叫んだ。ペ吉がまた一人出て来て、「そでない。」と云った。しゅつこは、気味悪そうに川のほうを見た。けれどもぼくは、みんなが叫んだのだとおもう。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さいかち淵

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>